◎春風吹く頃遠き先生の許へ

岩代服部てい子

春風は今、こゝに音信れて、筆もつ私のリボンを、輕うなでゆき候。さてゆくへはと見れば、敷石の上に餘念なう遊べる小雀のあたりとは、その和毛の小ゆらぎにて知られ候。あゝ、此春風は先生のお書齋にも吹き入りて、繙からるゝみ本をそよがすしてをらんと存じ候。かの香り高き梅の木かこみて、一つとや歌ひ、あのしだれ櫻の下に、先生のみ手にすがり、胡蝶逐ひて遊び居りし時には、いつも此春風とも〴〵にて候ひしよ。あゝ、此春風、先生のこの地旅立ちましてより、早五つ度吹きかへり候て、今年もかの白梅咲かせ候。櫻も遠からず咲かすべく、しきりに枝をもて遊び居候。今朝登校の折り、なにとなうなつかしくて、かの梅の下にたゞずみ候ひしに、やさしき先生のみ聲きこえて、袴に落ちしは、こゝに封じ込めたる一輪に候。あはれあたゝかきキツス給はりとうあゝ、先生、けふ此頃櫻の下に遊べる兒等は、あの頃はまだあたゝかき母君の懷に罪なきゆめを結び居りし今年尋常一年の生徒に候。あゝ、今更に身に浸み候ふは、先生お口癖の「光陰矢の如し」の語に候。あゝ、ゆるさせ給へ、かやう墨黒々しきを。こもまたかの風の仕業に候へば……。あゝ、先生よ、お身お大切に願ひ上げ候。先は春風にうながされて、日頃の御無沙汰謝し奉り候。また足らぬ此文の御添作、樂みに待ち居り候。かしこ

底本：「女子文壇」第四號　明治三十八（1905）年
入力：小林　徹
公開：令和三年四月十四日
リンク：水野仙子ホームページ